

## &lt;資 料&gt;

## 古典・文学にみる金平糖

中 田 友 一  
鈴 木 し の ぶ

金平糖と言うと、小さな砂糖菓子であることは多くの人達に知られている。しかし最近ほとんど店頭で目にしなくなったのが現状である。ちょっとした事から金平糖の角の出来方に興味をもった著者は、金平糖の製造過程を調べて、物理的数学的解明に少したずさわった。その経過の中で金平糖の歴史、動物植物にまつわる事柄や、文学作品の中にもいくつか扱われていることを知ったのである。

一度、金平糖の文字が載っている古典や、文学作品を少し調べてみようと思った。多分文献も余り多くないだろうと考えたからである。ところが、調べ始めると次から次へと色々な文献が出てきて、日本には古い文献がいかに沢山残っているかについて驚きを覚えさせられたものである。

金平糖は1569年ポルトガル人のキリスト教宣教師ルイス・フロイスによって織田信長に献上されたのが日本史に表われてくる始まりである。それ以来今日まで422年の歴史を金平糖は日本でもっており、ポルトガルやスペインでの歴史と合わせると、世界のお菓子の歴史の中でも随分長い歴史をもっているのである。

信長の後は、秀吉等の武将に愛され、さらに金平糖は茶道の御菓子の1つにも数えられるようになっていく。高級な唐来物として天皇家等貴人達に好まれる一方、キリシタン禁制と共に一時その高級品の地位を追われるが江戸中期に日本製の金平糖が発売されると、広く日本中に行き渡るようになる。それでも明治の後半までは、裕福な人達のお菓子として金平糖は扱われてきている。ところが、明治の終わりから大正にかけてアイスクリームやチョコレートが出回り出すと、その高級品としてまた愛用品としての位置をうばわれ、店頭から少しずつその姿を消していくのである。

それでも第1次大戦以後第2次大戦を通じて兵隊の携帯食糧としてカンパンの袋の中に金平糖が入れられ、雑菓子として広く大衆に親しまれるようになった。そして現在では気をつけて探し廻らないと、金平糖の姿はなかなか見つけることさえ出来なくなってしまったのである。それでも日本全国でまだ10軒余りの会社で金平糖が作られているのは、日本人が金平糖に対して根強い愛着を持ち続けている表われであろう。

日本人と金平糖がこの400余年間、どのように係わり合ってきたのか、また金平糖が文学の中でどのように描かれてきたのか、さらに有名な人物と金平糖との関係を調べることは、とても興味深い。偉人達が金平糖を食べている姿を想像すると、遠い歴史的な人物達もとても身近な存在として感じられるのである。

近い将来に歴史的な人物と金平糖について書いてみたいと思っているが、今回は今まで集めた資料をこゝに整理して報告しようと思う。

基本的な考え方は、まず見つかった文献の実際の文をあげてみることに、次に文献の著者の経歴を調べてみることに2点である。

著者のアイウエオ順に並べてみた。これ以外に論文に関するものや、最近の新聞、テレビに関するものも資料としてあるが、今回の資料には載せないことにした。さらに一部の文献については著者経歴が不詳なので、欠落しているものもある。また、文献の実際の文が長い場合は、省略したものもある。

なお、各文献の前に番号を付した。これは巻末の文献一覧番号に対応している。

## 01 著者 朝日文左衛門 作品 鸚鵡籠中記

作品について 朝日文左衛門の個人的な日記である。様々な出来事をこと細かく記録している。1710(宝永7)年4月22日の記録に金平糖が出てくる。

同廿二日 快晴。荷物したゝめ八郎右処迄もたせ遣し置。夕飯後に予

等行〔召仕と挟箱は暮に来る〕風呂の後酒給。西本願寺ヨリ東本願寺へ行。北西の石垣出来す。高九尺余。大石を以て造之。惣地形九尺斗築上く。下の町並の棟と、大かた同じ。座間明神を拝し、四橋・堀江等を過。次兵衛へ暮に寄。酒給。夜食出〔八一ともに四人なり。〕薄四来幾余一膏。亥過帰り、八郎右に宿す。今朝八ヨリ大鯛一ツ来る。さだヨリ雪駄二足宛、有。馬へぎにのせ、金餅糖一曲物づゝ来る。九条様御帰京。予御役料井田源助に頼置候処、今日払。両に壺石壺升八合。〔此代十三両三匁八分九りん。〕西門跡名古屋通り美濃路ヨリ上り。

出典 名古屋市教育委員会編集兼発行『名古屋叢書続編 11 卷(鸚鵡籠中記(三))』1968年 p. 571

著者について 尾張の御畳奉行。

07 著者 石橋幸作 作品 金平糖談議

作品について 駄菓子について書かれた『駄菓子のふるさと』の第一章「東北に遺る駄菓子の伝承と民俗」の中にある一節である。金平糖の角や、製造法などについて書かれている。

本文は長いので省略する。

出典 石橋幸著作『駄菓子のふるさと』製菓実験社 1965年 p. 30—35

著者について 調べつかず。

08 著者 泉鏡花 作品 雛がたり

作品について 1917(大正6)年3月、「新小説」に発表された短編である。

雛にまつわる幼時の回想と静岡への旅を書いている。

ふる郷も、山の彼方に遠い。いずれ、金目のものではあるまいけれども、紅糸で底を結えた手遊おもちゃの猪口や、金米糖の壺一つも、馬で抱き、駕籠で抱えて、長い旅路を江戸から持って行ったと思えば、千代紙の小箱に入った南京砂も、雛の前では紅玉である、緑珠である、皆敷妙の玉である。

出典 『鏡花短編集』岩波書店（岩波文庫）1987年 p.119

著者について 1873（明治6）～1939（昭和14）。石川県生まれの小説家。本名は鏡太郎，別名は畠芋之助。父親は彫金工，母親は葛野流かどのの鼓の家である中田の娘である。1891（明治24）年，尾崎紅葉をたずね，入門を許されて，以後3年間同家に寄宿した。1899（明治32）年ごろから，1905～6年にかけて，小説界の第一者となる。

#### 09 著者 井原西鶴 作品 日本永代蔵 卷五

作品について 1688（元禄元）年刊の浮世草子で，6巻6冊から成る。「大福新長者教」の副題がある。当代のあらゆる種類の致富譚を描こうとし，その成功談，失敗談30編をつづったものである。そのうち巻五の1「廻り遠きは時計細工」の中に，金平糖の製造に成功した「長崎わづかに纏なる町人」の話が収められている。

こまかに心を付けて見しに，是も南京より渡せし菓子金餅糖こんべいたうの仕掛，色々せんさくすれ共終に成りがたく，唐目一斤銀五匁づゝにして調へけるに，近年下直げちきなる事，長崎にて女の手業に仕出し，今は上方にも是を習ひて弘まりける。初めの程は都の菓子屋さまごま心を碎きしに，胡麻りふ一粒を種として此ごとくなれる事を知らざりき。是をそもそも智恵付わづかきしは，長崎わづかに纏なる町人，二年あまり心をつくし，唐人に

尋ねしに更に覚えたる人あらずして、気をなやませける。律義なる他<sup>ひと</sup>の国にも、よき事は深く秘<sup>かく</sup>すとみえたり。胡麻粒にも沸湯をかけて渡しければ、その木つき見た人もなく、何程か蒔きても生え出る事なし。ある時高野山にて、何院とかやに一度に三石蒔かれしに、此内より二本根ざし蔓りて、今世上に多し。此の金餅糖も種のなきにや、胡麻より砂糖をかけて次第にまるめければ、第一胡麻の仕掛に大事あらんと思案すまし、まづ胡麻を砂糖にて煎じ、幾日もほし乾<sup>いか</sup>げて後、煎鍋<sup>かわら</sup>へ蒔きてぬくもりの行くにしたがひ、胡麻より砂糖を吹出し、自から金餅糖となりぬ。胡麻一升を種にして金餅糖二百斤になりける。一斤四分にて出来し物、五匁に売りける程に、年も重ねぬうちに、是にて二百貫目仕出しぬ。後には是を見習ひ、家毎に女の仕事となせば、此男菓子をばやめて小間物見世を出し、なほ才覚の花をかざり、商売に身をなし、其一代に千貫目持とはなりぬ。

出典 『日本永代蔵』暉峻康隆訳注 角川書店（角川文庫）1987年 p.135  
— 138

著者について 井原西鶴（1642（寛永19）～1693（元禄6））。通称を平山藤五といい、江戸中期（元禄期）の上方を中心に活躍した俳人、浮世草子作者である。大坂の富裕な町家に生まれ、西山宗因の門に入り、談林で活躍したが、1682年に宗因が没するや『好色一代男』を刊行、浮世草子作者に転じて多くの傑作を発表した。

## 11 著者 内田銀蔵 作品 日本近世史

作品について 1903（明治36）年に富山房から刊行されているが、この時刊行されたのは第1巻上冊1のみである。諸論、第1編第1章、その附録五篇から成っている。著者留学直前に刊行されたが、公刊されたのはこの1冊のみ。帰国後も続稿はまとめられたのであろうが、発表されないまま終っている。「はじめに断り置くべき條々」に第1巻から第5巻までの構成

の概略が示されていることによって、その全貌を知ることができる。この中の「第1編切支丹禁政及鎖国第1章切支丹宗教興隆の事情」の第9節に、布教手段に金平糖が使われたことが記されている。

或は云ふジェスト僧の布教手段たる、米銀を給し、又は健達<sup>コンダツ</sup>(念珠)、眼鏡の類を與へ、若しくは葡萄酒及カステイラ、コムペイ等の乾菓を饗して、人を誘ひしを以て、人の現在の恩恵に懐き、自から其の教に歸したるなりと。然れども此等の方法は實は抑々末のみ。決して熱心なる信教者を得る所以の道に非りしや明なり。其眞に彼の教に歸依し、其の教に殉ずることを辭せざる幾多の信徒を得るに至りたるは、蓋し別に其の故なくんばあらざるなり。

出典 『明治文學全集 78 卷明治史論集 (2)』 筑摩書房 1976年 p. 308  
下～309上

著者について 1872 (明治5)年、東京に生まれる。1893 (明治26)年、帝国大学文科大学国史学科へ入学、1896 (明治29)年卒業。1898 (明治31)年、東京専門学校講師となり、国史、經濟史を担当する。また1899 (明治32)年には東京帝国大学文科大学講師として日本の大学で初めて、日本經濟史を講義した。1902 (明治35)年には、文部省外国留学生として史学研究のため、3年間の英・仏・独国留学を命ぜられ、またこの年に文学博士の学位を得ている。1903 (明治36)年に留学のため英国に出発。この年の3月に『日本近世史』第1卷上冊1を刊行。1906 (明治39)年帰国、翌年京都帝国大学文科大学の専任教授となり、史学科国史学第1講座を担当する。1909 (明治42)年には、史学研究の発表機関として、同志と共に史学研究會を創設している。1912 (大正元)年、『經濟史總論』を刊行する。1918 (大正7)年欧米出張に出発、翌年3月に帰国し、4月に『近世の日本』を刊行したが、同年7月、死去。日本の經濟史を学問として大系化した先覚者である。

## 14 著者 大田南畝 作品 一話一言

作品について 1776 (安永4) ~ 1891 (文政3) 年に成立した随筆集である。南畝自身の随筆ばかりでなく多くの抄録をも含んでいる。和漢の学殖や文明批評的な視野がうかがわれ、在世中から一部の知識人の間で転写、愛読された。その中で、「桔梗屋菓子銘」の中に金平糖が出ている。

天和三癸亥年十二月十九日桔梗屋菓子銘 此桔梗屋にて鶴の音なきしける時、□□ノ養狂歌に、ききやうやにごればくハじよすめばくハしみなくだかけをとてこうとなく。」 / 京都御菓子司本町一丁目北頬 桔梗屋河内大掾 / 御菓子品々 / さざれ石 長命糖 千年該 せう寿糖 (中略) こりん こんぺいとう げんじあめ 朝日やき (以下略)

出典 『日本随筆大成別巻1巻』吉川弘文館 p. 23

著者について 1749 (寛延2) ~ 1823 (文政6)。江戸時代後期の狂歌師、狂詩作者で、また幕臣でもあった。本名は覃, 通称は直次郎で、南畝は号。他に寝惚先生, 四方赤良, 杏花園, 蜀山人, などの号がある。江戸牛込の生れ。父は幕府の御徒士<sup>おかち</sup>で、南畝も17歳で御徒士になって以来50年余を幕臣として勤務した。文学的な面では、早くから漢詩文に親しみ、18歳のころに内山賀邸, 松崎観海の門に入っている。1768 (明和4) 年ごろには狂詩作者として有名になっており、1770 (明和6) 年ごろには狂歌もはじめている。また26歳ごろからは洒落本にも係わるようになるが、39歳ごろから54歳ごろまでは幕臣の務めと学究に専念するようになる。

## 17 著者 小瀬甫庵 作品 太閤記

作品について 15巻から成る。豊臣秀吉の一代記は多く書かれているが、甫庵著の「太閤記」は、いわゆる「太閤記物」の祖といわれており、著者の儒者としての立場から史実を批判し、世人を指導しようとしたものであ

る。この中で「或問」の部分に、金平糖が他の菓子とともに出ている。

或問、ばてれんは日本之宗旨に対しては、何程あしき事に候や。答曰、宗旨に対し、あしき事は扱置ぬ。日本之大敵にて候也。きりしたんの法を<sup>しうざる</sup>不知国々へ広めそめて、彼国へとらざる所更になしとかや。流宋、<sup>るすん</sup>いすぱんにや、のびすぱんにや、<sup>こあ</sup>呉阿、ぶるとがる、かやうの大国を十二ヶ国法をてらひひろげて取し也。るすんなども、<sup>はじめ</sup>初一丁四方を、銀子拾貫目之年貢を出し、かり候て、二階三階に大なる家をつくりなし、黒船之荷物をはこび入、珍しき物共をみせに出し置、市を立しやつばいの便を快くし、所の吏務へ捧物を夥くかよはせ、其下にある有司<sup>ならびに</sup>並近習之人々に、浅からぬ音信をひそかにはこび、<sup>よき</sup>能やうにこしらへ侍る段、<sup>ことのほか</sup>事外上手也。若一町之所へ、見物などに件之人来りたりしかば、上戸には、ちんた、ぶだう酒、ろうけ、がねぶ、みりんちう、下戸には、かすていら、ぼうる、かるめひる、あるへい糖、こんぺい糖などをもてなし、我宗門に引入る事、尤ふかゝりし也。有人曰、此宗門を絶、葉をからすやうになる制法もあらんか。恨くは、寛永之制禁五分一ほど、秀吉公之時代に有しかば、今程は、きりしたんの法種<sup>あるひといはく</sup>絶果ん物を。

出典 『太閤記』新人物往来社 1971年 p. 29～30

著者について 1564～1640、江戸初期の儒医で美濃の人。易学や兵法に精通しており、豊臣秀次、のちには堀尾可晴に仕えた。

18 著者 小山田與清 作品 松屋筆記

作品について 随筆集若しくは備忘録に所感を併記したような内容を持ち、120巻から成る。現存するのは84巻。食べ物に関して記載も多く、巻70には金平糖も登場する。



金平<sup>キンヒラ</sup>午房<sup>ゴバウ</sup>金平<sup>キン</sup>娘<sup>ヘイトウ</sup>金平<sup>キン</sup>糖<sup>ヒラ</sup> 門人澁谷保がいへらく越後國に金平<sup>キンヒラ</sup>といへる  
 謡<sup>ウタ</sup>ありその曲<sup>フシ</sup>節<sup>シ</sup>經<sup>シ</sup>などよむに似たりと云々その金平はいかなるゆゑぞ  
 と問に公<sup>キントキ</sup>時<sup>キ</sup>の子に金平<sup>キンヒラ</sup>とて頼義の四天王の1人の勇士の事をつくり設  
 たる也されば強きものゝたとへにキンヒラといひて越後には金平午房  
 は必蕃椒を加へて調味せしにいふ。それも鹽味薄きをば金平ナラズと  
 いへりとなん金平の事は燕石雜志四の卷〔九丁巳下〕にいひたれば考  
 べしさては江戸にて元氣娘をキンヒラといひ又金平<sup>キン</sup>糖<sup>ヘイ</sup>といふも實はキ  
 ンヒラ<sup>クワ</sup>糖<sup>クワ</sup>にて娘の氣の強きをキンヒラ砂糖の甘味強きをコンペイなど  
 みなつよき事にいへる也けり保<sup>タモツ</sup> 俗稱は久米之丞越後國蒲原郡高關村  
 の里長也そこは新潟より七里許の所也とぞ妻はみわ子といふ夫婦共に  
 余が門人也みわ子は山登<sup>ヤマト</sup>檢校に學びて琴をよくす

出典 小山田與清著『松屋筆記』(卷70) p. 58

著者について 小山田與清 1782—1847。江戸末期の国学者。号は松屋。<sup>まつのや</sup>  
 高田与清とも。武蔵の人で、群書を蒐集し、考証の学に通じていた。また、  
 水戸公の知遇を得て、『八州文藻』『扶桑拾葉集註釈』を撰。

## 19 著者 貝原好古 作品 和爾雅

作品について 八卷九冊から成る辞書。1694(元禄7)年刊。中国の『爾雅』にならって作ったもので、天文、地理、神祇や身体言語など、24の部に分類し、終りに雑類を付している。漢字で記し、そのよみを加え、ことばの由来を中国や日本の諸書から示して、意味や用法を述べる。第19、「飲食門」の「果子」の項に金平糖が記されている。

環餅<sup>ヒクワシ</sup>〔環餅、膏環。寒具。索餛子。捻頭。並同。〕糖<sup>コン</sup>花<sup>ベイト</sup>。巧<sup>アブラ</sup>果<sup>モチ</sup>。饅頭<sup>マンヂウ</sup>  
 [饅又作饅。饅本用肉餡。其用蔬者名素饅頭。無餡者名蒸餅。餅又作甍。  
 或謂之籠餅。]

出典 益軒会編『益軒全集 全八卷之七』国書刊行会 1973年 p. 709

著者について 貝原好古 1664—1700。江戸時代の歴史家。字は敏夫，通称は市之進，号は耻軒。貝原益軒の叔兄である福岡藩士貝原義質（楽軒）の長男で，益軒の甥にあたる。好古の父楽軒は『浦疋条令』を編するなど，文筆の嗜みがあった。好古も学にすぐれ，編集の才があった。益軒と親密で，益軒に従って諸所を訪れたり，また和漢の事物の故事来歴に関心を持ち，益軒の指導の下，数編をまとめたりもしている。

20 著者 亀田長興 作品 こうせいいちらん 侯鯖一鱒

作品について 5冊から成る。1842（天保13）年に亀田保が補輯して版行したとされている。天地，人物，器材，物産の4つに分け，事物の異名を輯めて，その出處を示している。その中の「卷之四 器材」で金平糖が出ている。

コンヘイトウ  
糖粒 明屈大均廣東新語廣中市肆賣者有繭糖窠絲糖也其煉成條子而玲瓏者曰糖アルヘイ通吹之使空者曰吹糖フキアメ小曰糖粒大曰糖瓜

出典 『侯鯖一鱒』卷之四 18（オ）

著者について 1752～1826。江戸時後期の儒者。折衷派の学者で，江戸の人。名は翼，のち長興（ながおき）・文左衛門，字は釋龍・心卿，鵬斎・善身堂と号す。折衷学者井上金峨に学び，山本北山とともに荻生徂徠ら古文辞学派の説を排撃した。詩文にすぐれ，書も巧みであった。他の著書に『論語撮解』などがある。

23 著書 川北喜右衛門 作品 原城紀事

作品について 内外古今の多くのキリシタン関係の史料を参考にまとめられたものである。前編を、天教之害上、中、下、天教之禁、の4つに分け、本編を原城興廢、天草記略、以下は16に分けて構成されている。また、表記は漢文でなされている。前編第二「天教之害中」で、金平糖が出てくる。

弘治三年。丁巳。波爾杜瓦爾。載一伴天連。能通其術。有口才者。至肥前唐津說法。凡此輩皆善我言語。知我事情。大擲金寶珠玉。種種珍玩。或與落胡結谷逆。勿木裂即姑等。美酒。又製角寺鐵異老。復鳥而。革二滅以而。掩而皿兮。哥目穴伊等甜甘奇味。延客結交。周旋懇厚。無處不至。我老少男女。接其款待。歸教者如市。自平戸長崎。至豊前小倉。舉九州。奉其教。

出典 『長崎叢書（一）』長崎市役所 1926年 p. 39

著者について 1854（嘉永6）年没。肥前国島原の藩士。喜右衛門は通称。字は儀卿、温山、春風楼とも号した。古今の学に通じ、また詩文の才もあったという。1844（天保5）年に、再興された稽古館の教授に任ぜられ、政務の傍ら人材育成に力を注いだ。著書に3巻から成る『温山文集』がある。

## 26 著者 北田薄氷 作品 食辛棒

作品について 1897（明治30）年の『少年世界』第3巻第23, 24号に掲載された児童小説である。お鶴とお亀の姉妹が学校から帰る途中で、姉のお鶴が、今日は何の菓子もらえるだろうか、と思ひめぐらす場面である。

今日も學校が退校てのかへりもち飯途、お鶴はお亀と連立って歩きながら、又しても胸に浮べて居りますのは、例のお菓子の事。母様が今日は何を下さるだろうか。えゝと、昨日がカステラと金米糖であったから、今日は何だらう、ワップルでゝもあらうか。それともお饅頭か知らん。どっち孰方でも可いからお亀ちゃんの二つ分も下されば可いがねえなどと、

夢中になって考へて居りますから、お亀がいろいろ學校の話を為掛けても、些も耳へは入りませんで、生返事ばかりして居りましたが、我家が近くなるにつれて、もう堪へられなくなったか、お亀を残して、一人で飛ぶがやうに駆け出して、急ぎましたが、(以下略)

出典 『明治文學全集 95 卷明治少年文學集』筑摩書房 1970年 p.140下

著者について 1876(明治9) — 1900(明治33)。小説家。本名は尊子。東京生れで、尾崎紅葉の門下である。児童小説は10編ほど書いており、この作品もそのうちの1つである。1898(明治31)年に画家梶田半古と結婚して1児をもうけたが、結婚生活2年で肺を病んで没した。

27 著者 喜田川季莊 作品 守貞漫稿

作品について 1852年ごろに成立したと推定されている。江戸の風俗事典ともいふべきものである。このうちの第28編「食類」に金平糖が図入りで載せられている。

金平糖或は金米糖と書く砂糖に小麥葛を交へて煉り、芥子を種として銅鍋を以て漸くに大とし製す大略一人一日拾斤を製すを常とす精粗あり大小あり大坂にてのみ製之しが文政以来江戸に一二戸製之店を開き近年は諸所に在之團にして外面委く角あり角を「いら」と云也

出典 『守貞漫稿』名著刊行会 1979年 p.439 ~ 440

著者について 調べつかず

28 著者 喜多村節信 作品 嬉遊笑覽

作品について 序文によると1830(文政13)年に成立した随筆で、12巻、付録1巻から成る。著者節信が諸書から抜き出した遊戯、家具什器、歌舞音曲など、江戸の日常生活や風俗に関する記事に簡単な考証を加えて部類分けをした、一種の風俗事典とも言えるものである。そのうち巻十上(飲食)に金平糖があげられている。

金餅糖 / 「永代蔵」南京より渡りて仕掛色々せんさくすれども成がたく、唐目一斤銀五匁づゝに調べけるに、近年下直なる事、長崎にて女の手わざに仕出し、今は上がたにも是にならひて弘まりける、胡麻一升を種にして金餅糖二百斤になりける、一斤四分にて出来ける物を五匁に売ける云々、昔は罌粟を用ひざりしにや、物の価今とはいたく異なり

出典 『日本随筆大成別巻 嬉遊笑覧4』吉川弘文館 1979年 p.116

著者について 1783(天明3)～1856(安政3)。江戸後期の考証家。通称は彦助、のち彦兵衛。名は信節<sup>のぶよ</sup>ともいう。字は長岐。静舎などと号する。江戸に住み、北静廬や岸本由豆流と交流して研鑽を積んだ。博覧強記をもって聞こえ、和漢の学に通じ、書画もすぐれた、雑学者であったという。著書には、『瓦礫雑考』『武江年表補正略』『画証録』などがある。

### 30 著者 幸田露伴ほか8名 作品 草鞋記程

作品について 1892(明治25)年に非売品として刊行された。のち『新古文林』(1906(明治39)年)に再録、『書物往来』(1926(大正15)年)にも載せられた。また、当時から稀覯本であった。内容は1892年11月20日から3日間の、いわゆる根岸派の文人による妙義山紀行である。この妙義山への旅行は、須藤南翠が大阪朝日新聞社に聘せられて東京を去ろうとする際の記念に行われたものである。露伴の他、劇童子關根只好(黙庵)、高橋太華、森田思軒、錦隣子久保田米僊、須藤南翠、幸堂鈴木得知、富岡永

洗の合作である。旅行の車中の描写に金平糖が出ている。その場面は森田思軒の筆によるものである。

幸にして汽車の中こみ合はざれば八人よき程に一かたまりとなりて坐を占む此辺彌望平遠の畑にして間散點せる林樾と断續せる村落を見るのみ先刻より田舎の景色にぜいたくしたる眼には早やさして珍しからず幸堂氏袖を探りて銀杏豆と金米糖とを盛りたる紙袋を取出だし分ちて人ごとに七粒づゝ持たせ之を賭にしてチャン拳を闘はしむかけ聲笑ひ聲交も起りて哄然たるうち覺えず二三つのステーションを過ぐ既にして露伴氏は一隅に退き空樽を枕として眠る米僊氏は梨の皮をむき永洗氏は海苔まきの竹の皮を開き余は福神づけの包をあけて共に衆に勧む

出典 明治文學全集 94 卷『明治紀行文學集』 筑摩書房 1974 年 p. 57 上

著者について 明治文學全集では幸田露伴編に収められているが、この部分の執筆担当は森田思軒である。思軒は岡山県生れの新聞記者、翻訳家。本名は文蔵。別号は紅芍園主人、羊角山人、白蓮庵主人など。慶応義塾に学び、特に矢野龍溪に師事し、阪田警軒の興讓館に漢学を学んだ。龍溪に招かれて「郵便報知新聞」に入って記者となり、中国や欧米に特派されたが、この間政治よりも文学に関心を傾けた。1887（明治20）年、ベルヌの『仏曼二学士の譚』（のち『鉄世界』と改題）を「郵便報知新聞」に発表、翻訳家として出発する。以後、ユゴー、ディケンズ、ポーなどの作品を、いわゆる「周密文体」で紹介、名声を博した。1861～1897。

31 著者 マテウス・デ・コーロス 作品 1619年2月23日付書翰

作品について 1629年2月23日付、長崎発、マテウス・デ・コーロスが、イエズス会総会長補佐であったヌーノ・マスカレーニャスに宛てた書翰である。逮捕されたプロクラドール、つまり日本イエズス会の財務担当パー

ドレであったカルロ・スピノラについて、また、イエズス会パードレのセバステアン・ヴィエイラをめぐる女性関係の不詳事にも触れている。前半、スピノラの身の不注意さを述べている中に、砂糖菓子が出てくるが金平糖と似たところがある菓子と思われるのでここに挙げる。

同パードレはからだの具合が悪く、日本に来て以来、常にわれわれの食事をとり、日本の習慣や風習に順応することが出来なかった。そしてあの家で生活のあらゆる安楽をむさぼっていた。そのほかに、その家主のポルトガル人の妻と二人の従僕が、同パードレに対し、われわれの食事の非常に優秀な料理人として奉仕した。あの家から締め出されて、彼以外のわれわれ全員がみな行っているように、日本人たちの家々を巡ることに対して、際立った嫌悪が彼には認められた。これほど厄介をかけ、そしてこれほどの安楽がないと暮らせないような人々は、現在の日本に向かないのは事実である。茴香だけを材料にした砂糖菓子まで、彼は自分の手で作り、持ち歩いた。あの家でイエズス会が失った財の価値は、600クルザドを越える。そのほかに家主の損失がある。彼はすべての財産が没収されたからである。

出典 『イエズス会と日本 二』（大航海時代叢書（第Ⅱ期）7）岩波書店  
1988年，p. 243～244

著者について マテウス・デ・コーロスはポルトガル人イエズス会士で、1583年にイエズス会に入会し1590年来日。1596年にマカオへ行き司祭叙品を受けて同年再来日、1614年にマカオへ追放されたが翌1615年に日本へ入国し、1617年7月から1621年10月まで日本管区長をつとめた。

32 著書 今 東光 作品 金平糖

作品について 雑誌「あまから」1966年10月号に掲載されたものである。「東光食物行脚②」で、金平糖を取り上げている。西鶴や「和漢三才図会」

の記述を紹介しながら金平糖について語っている。

本文は長い為、省略

出典 「あまから」(雑誌) 1966年10月号 p. 45～47

著者について 1898～1977。小説家。

### 33 著者 西條八十 作品 お菓子の家

作品について 「赤い鳥」1919(大正8)年10月に発表された童謡。

山のおくの谿あい／きれいなお菓子の家がある／門の柱は飴ん棒／  
山の瓦はチョコレート／左右の壁は麦落雁／踏む舗石がビスケット／  
あつく黄ろい鎧戸も／おせば零れるカステイラ／静かに午をしらせる  
は／金米糖の角時計／誰の家やら知らねども／月の夜更におとずれて  
／門の扉におぼろげな／二行の文字を読みゆけば／「ここにとまって  
よいものは／ふたおやのないこどもだけ」

出典 『日本童謡集』岩波書店(岩波文庫)1957年 p. 36

著者について 1892～1970。詩人。

### 34 著者 坂本四方太 作品 夢の如し

作品について 1907(明治40)年2月から1909(明治42)年4月にかけて  
「ホトトギス」に9回にわたって連載された、四方太唯一の長編小説で、単  
行本としては、1909年に民友社から刊行されている。この作品は「写生文  
的自伝」といわれるが、「自序」によれば「余の正確なる自叙傳でも無く、



又全くの小説でも無い。只だ断片的の事實と多少の想像とを取合せて、それに依て我が少年時代の感想を再現させようと試みた文章」であるという。饅頭屋を商む叔母の家へ遊びに行った「自分」と、その叔母の家の間借人らしい「お冬さん」との会話の中で金平糖が出てくる。

お冬さんは年中長火鉢の抽斗の中に焙り昆布を貯へて居る。遊びに行くたびに二三枚づゝ出してくれる。さうして長煙管で煙草を飲む。口を結んで煙を横の方につーと一筋吹出す癖がある。西側の壁にたつた一つの圓窓があるばかりで陰氣な部屋だが、茶棚や簞笥が小ざっぱりして居って気持が善い。此部屋から見ると自分の家などは乱雑で不意氣で百姓家のやうなものである。自分は斯ういふ静かな小ぢんまりした部屋にいつまでも居りたい様な氣がする。何故其様に好きかと問はれても一寸困るが、一口にいへば此部屋の匂が好きである。お冬さんは針仕事の手元を見つめて居って話をする。自分は焙り昆布を嚙って話をする。「坊様何が好き」「お菓子」「お菓子は何が好き」「……………金米糖」といふやうな、他愛も無い話ばかりだが、いつまで経っても飽きる事を知らぬ。

出典 明治文學全集 57 卷『明治俳人集』筑摩書房 1975 年 p. 347～348

著者について 1873（明治6）年～1917（大正6）年、島根県生れの俳人。別号文泉子、本名四方太。東大國文科卒業。二高時代に高浜虚子と親しみ、上京後は正岡子規の指導を受けた。後に、子規が創めた写生文に力を注いで句作から遠ざかり、子規没後は「ホトトギス」の募集写生文の選に当たり、後進の指導育成に努めた。また東大の司書なども勤めていた。

35 著者 山東京伝 作品 通言総籙

作品について 1787（天明7）年に刊行された酒落本である。黄表紙本『江戸生艶氣樺焼』の登場人物3人を再度主人公とし、続編の形をとりながら

吉原の大店の世界を穿った作品であり、天明全盛期酒落本の代表作といわれている。大尽客のとりまきである北里喜之介を艶次郎と志庵が訪ねる場面で金平糖が顔をのぞかせている。

[ゑん] ときやうさんや、ぶんきやうさんとちがつて、青ろうへはとんとござらねへの。俳諧と義太夫は、きついもんだそうだの。(トいゝながら、こしから、ゑち川屋が仕立の、あんぺらの内ぬひ、りうさのねつけのついた、さげのたばこ入から、きせるを出し、すい付る。女房はせんとくの火ばちにかゝっている、ひろしまやくわんのちやをついで、兩人へ出す。喜の介はよりかゝっている、たはらや宗理がかいた、きくのはん戸だなから、豆のはいつたこんぺいとうをいだし、) [喜の] これでもあがりやし。(トゑん二郎がまへへをく) [しあん] ゑんさんが酒をのまつしやらねへは、玉にきずだよ。[喜の] めいよう、今の通は下戸さ(トうれしがらせる。) しあんさんにやあ、いゝものがある。きのふ長崎屋のこはんが所から、隅田川をもらつた。おせち、かんをさせや。しかしさかなが何も、あんめへす。[しあん] 寒見舞のこぶ巻はなしか。あのなべのはなんだ。[ゑん] よくげびをいふやつだ。……

出典 日本古典文学大系 59 巻『黄表紙・酒落本集』岩波書店 1958 年  
p. 358 ~ 359

著者について 山東京伝 (1761 ~ 1816)。江戸中期の酒落本・黄表紙・読本・滑稽本、合巻作者。北尾重政に浮世絵を学んで北尾政演と名のつた。黄表紙『御存商売物』(天明 2 刊) が大田南畝の絶賛をうけて一躍流行作家となる。文学にウエートが加わるにつれて、絵から遠ざかるようになっていった。晩年は考証家としての業績も大きく、また狂歌も巧みであった。

36 著者 塩見坂梅庵 作品 料理塩梅集

作品について 1668 (寛文 8) 年成立。天と地の 2 部に分かれ、地の巻は

天の巻に編集されなかった部分を追加としてまとめたと考えられ、著者が収集した聞書を集めた形となっている。このうち、天の巻の「物置部」の1つめに金平糖が出ている。

こんぺいとう かるめら かやうの類は桐の箱に入置がよし

出典 松下幸子, 吉川誠次著 「古典料理の研究(二)——料理塩梅集について——」 千葉大学教育学部研究紀要第25巻第2部 1976年 p. 185

著者について 不詳

### 38 著者 島崎藤村 作品 春

作品について 1908(明治41)年4月7日から同年8月19日にかけて「東京朝日新聞」に掲載された長編小説である。また、同じ年に『緑蔭叢書』第2編として自費刊行もされている。『破戒』に続く、藤村第二の長編として有名である。友人達と文学上の仕事をしていた岸本捨吉が、生活の重荷にも負けず、初志を貫こうとする姿を描いている。その岸本が初めて東京へ出る時の様子に金平糖が出ている。

世の變遷<sup>うつりかはり</sup>は、岸本が國の方から他郷へ向けて移住する多くの人々を出した。彼の郷里は檜樫などを産する深い谿谷の間で、耕作に適した土地も少いやうな地勢にある。街道が廢れるにつれて、多くの家族は幽鬱な森林を出た。斯ういふ人々の中には、舊<sup>きゅう</sup>士族、驛路を支配した家々、旅客を相手に生計を營んだ部落々々の商人または労働者などを數へることが出来る。彼らは住慣れた舊家を離れ、静かな爐邊を捨て、機や養の道具などを置いて、可憐しい故郷に別離を告げて行く移住民の趣がある。殊に岸本の家は、最も古くから住んだものゝ一つで、土地の馴染<sup>のぞみ</sup>も格別深いのであつた。母は子に、姉は夫に弟に逢ふといふ希望<sup>のぞみ</sup>を唯一の生命にして、そこを離れて來やうとする女連の心情は、

岸本が都會に居て想像するやうなものではなかった。いよいよ國に居る人達も出て來るとすれば、岸本は十三年目で母と一緒に住まはれることに成る。彼が亡父の嚴命を受けて、始めて東京へ遊學したのは、まだ髪を河童のやうに冠つて居た頃、金米糖を旅の鞆に入れて貰つて、勇んで國を出た程の少年の時であつた。

出典 明治文學全集 69 卷『島崎藤村集』筑摩書房 1972 年 p. 99 上

著者について 1872 (明治5) ~ 1943 (昭18) 年。長野県生まれの詩人、小説家。

### 39 著者 島崎藤村 作品 ふるさと

作品について 『幼きものに』につぐ、藤村の第二童話集であり、1920 (大正9) 年實業之日本社から「少年の讀本」として初版が発行された。短い童話 70 編から成り、また、父親が子供達に話しかける形式で書かれている。その中で、東京へ遊學が決まり (「55, 少年の遊學」) そして東京へ向かう道中 (「66, 棧橋の旅」「67, 山越し」) に金平糖が登場する。

#### 55 少年の遊學

父さんは十の歳まで、祖父さんや祖母さんの膝下に居ましたが、その歳の秋に祖父さんのいひつけで、東京へ學問の修業に出ることに成りました。父さんは友伯父さんと一緒にお家の伯父さんに連れられて行くことに成りました。『二人とも東京へ修業へ行くんだよ。』と伯父さんに言はれて、父さんは子供心にも東京のやうなところへ行かれることを楽しみに思ひました。父さんより三つ年長<sup>としようへ</sup>の友伯父さんが、その時やうやく十三歳でした。今から思へば祖母さんもよくそんな幼<sup>ちひさ</sup>少な兄弟の子供を東京へ出す氣になつたものですね。その時の父さんは今の末子より年が二つも下でしたからね。この東京行は、父さんが生れて初めての旅でした。父さんが荷物の用意といへば、小さな玩具の鞆

でした。それは美濃の中津川といふ町の方から玩具の商人が来た時に、祖母さんが買って呉れたものでした。『お前が東京へ行く時には、この鞆へ金米糖を一ぱいつめてあげますよ。』と祖母さんは言ひました。父さんもその小さな鞆に金米糖を入れてもらって、それを持って東京に出ることを楽しみにしたやうなそんな幼少な時分でした。

## 66 棧橋の猿

『もしもし、お前さんの背中に負<sup>しよ</sup>つて居るのは何ですか。』木曾の棧橋<sup>かけはし</sup>といふところの休茶屋に飼つてあるお猿さんが、そんなことを父さんに尋ねました。父さんは小さな鞆を風呂敷包にしまして、それを自分の背中に負つて居ましたから、『お猿さん、これは祖母さんがおせんべつに呉れてよこしたのです。途中で退屈した時におあがりと言つて、祖母さんが呉れてよこした金米糖です。わたしはこれから東京へ修業に行くところですが、この棧橋まで来るうちに、金米糖も大分すくなくなりました。』とお猿さんに話して聞かせました。このお猿さんの飼つてあるところは高い崖の下でした。橋の下を流れる木曾川がよく見えて、深い山の中らしい景色の好いところでした。街道を通る旅人は誰でもその休茶屋で休んで行くと見えて、お猿さんもよく人に慣れて居ました。父さんが東京へ行く話をしましたら、お猿さんも羨ましさうに、『わたしも一つ金米糖でも頂いて、皆さんのお供をしたいものです。御覧の通り、わたしはこの棧橋の番人でして、皆さんのお供をしたいにも、こゝを置いては行かれません。（以下略）

## 67 山越し

やがて、父さんは伯父さんに連れられて、『みさやま峠』といふ山を越しにかゝりました。父さんも馬籠のやうな村に育つた子供です。山道を歩くのに慣れては居ます。そにしても、『みさやま峠』は見上げるやうな峻しい山坂でした。大人の足でもなかなか骨が折れるといふくらゐのところでした。何故、伯父さんがそんな山越しにかゝつたかといふに、早く皆を連れて馬車のあるところまで出たいと考へたからです。木曾は山に圍まれた深い谷間のやうなところですから、どうして

も峠一つだけは越さなければ成らなかつたのです。何と言つても父さんはまだ幼<sup>ちひさ</sup>少かつたものですから、友伯父さんや吉さんのやうには歩けませんでした。『さあ、金米糖を出すから、もつと早くお歩き。』と伯父さんに言はれましても、父さんの足はなかなか前に進まなくなりました。伯父さんの金米糖に勵まされて復た父さんも石ころの多い山坂を登って行きましたが、そのうちに日が暮れかかりさうに成つて來ました。伯父さんはもう困つてしまつて、父さんの締めて居る帯に手拭を結びつけ、その手拭で父さんを引いて行くやうにして呉れました。

出典 いづれも『藤村全集第9巻』筑摩書房 1967年より。「少年の遊學」は p. 336 ~ 337, 「棧橋の猿」は p. 346 ~ 347, 「山越し」は p. 348。

著者について 『春』の項を参照のこと。

#### 40 著者 島崎藤村 作品 破戒

作品について 1906 (明治 39) 年に自費刊行された長編小説。日本文学最初の本格的な自然主義小説であり、大きな反響を呼んだ。数え年 35 歳の藤村に、第一流の作家としての文学的地位を得させた作品である。金平糖が出てくるのは第拾弐章、父の二七日を濟ませた主人公の丑松が、茶店で便船を待っている場面である。

<sup>かみさん</sup>主婦は家の内でも手拭いを冠り、藍染真綿を亀の甲のように着て、茶を出すやら、座蒲団を勤めるやら、金米糖は古い皿に入れて款待した。

出典 『破戒』新潮社 (新潮文庫) p. 171 ~ 172

著者について 『春』の項を参照のこと。

## 42 著者 杉本苑子 作品 コンペイトウ献上

作品について 1983年に文化出版局から刊行された『干潟の秋』に収められている随筆である。『日本の名随筆 54 菓』に再録されている。

本文は長いため省略

出典 『日本の名随筆 54 菓』作品社 1987年 p.118～121

著者について 1925年東京生れの小説家。文化学院卒。中世文学を学び、古典の造詣が深い。短編『申楽新記』が1951年に「サンデー毎日」30周年の懸賞小説に三席で入選後、吉川英治に師事し文学修業に励む。『孤愁の岸』で1962年に直木賞を受賞する。作品主題は、武士もの、芸道もの、王朝もの、など幅が広い。1976年刊の『滝沢馬琴』で吉川英治文学賞を受賞。古典文学関係の著作も多くある。

## 46 著者（江島）其磧 作品 軽口独機嫌

作品について 1734（享保18）年に刊行された噺本。五巻五冊から成る。三巻の2つ目の話「胆の潰れた京の看板」に「こんへい」の語が見える。

遠国者都へのぼり、京の町をあるきし所に、ある見世に大看板に、長崎こんへいとたいまいの櫛所とあるを、彼遠国者よんで見て、さてさて都ほどあつて、大きな事を引請て、せわをめさるる人がある。長崎権兵衛と大まいの公事所と有。身共等が山公事の世話もたのむべいか。

出典 『噺本大系第7巻』東京堂出版 1976年 p.244

著者について 1666～1735。江戸前期の浮世草子作者。

## 47 著者 醍醐山人 作品 料理早指南

作品について 四編から成る。一卷一冊本として出版された後、四巻合一冊、初篇と二篇、三篇と四篇をそれぞれ一冊にまとめた二冊本等が出されている。初篇は序によると1801(享和元)年に江戸の大和田安兵衛から一卷一冊本として出版された。四季の献立が春夏秋冬それぞれ三種づつ挙げられている。その中で茶菓子の部の夏の菓子として金平糖があげられている。

夏/卷せんべい/金平とう/みつ潰みかん/みぞれもち/ぬつとり/  
くるみもち

出典 吉井始子編 『翻刻江戸時代料理本集成第6巻』 臨川書店 1980。  
p. 168

著者について 不詳

## 48 著者 立原えりか 作品 麦畑

作品について 講談社刊『月あかりの中庭』に収録されている童話。「おばあさん」が「やよい」に話す昔の話の中に、結婚式の時に配った「金平糖入りのパン」が出てくる。

本文は長い為、省略

出典 『月あかりの中庭』講談社 1988年(第3刷)講談社文庫 p. 99~  
116

著者について 1937年生れ。童話作家。1959年に「人魚のくつ」で児童文学者協会新人賞、1961年に「でかでか人とちびちび人」で講談社児童文学



新人賞を受賞している。他に、「木馬がのった白い船」「小さな恋物語」等の作品がある。

#### 49 著者 團伊玖磨 作品 金米糖

作品について 「アサヒグラフ」1967年6月9日号に掲載、『続々パイプのけむり』に収録された随筆。「書き物をしている時に無くてはならぬ物」の1つとして金平糖をあげている。

本文は長い為、省略

出典 『続々パイプのけむり』朝日新聞社 1981年 p.176—180

著者について 1924年生れ。音楽家。日本芸術学院会員でもある。1946年東京音楽学校作曲科卒業後、作曲ならびに自作の演奏に従事している。1966年に日本芸術学院賞を受賞。歌劇「夕鶴」「ききみみずきん」「楊貴妃」他、交響曲、歌曲、劇音楽等多くの作品がある。また、著作も多く、『不心得12頭章』『エスカルゴの歌』『八丈多与里』などがある。現在も「アサヒグラフ」に連載中の随筆「パイプのけむり」は、単行本として『明けてもパイプのけむり』までの19冊が刊行されている。なお、『パイプのけむり』『続パイプのけむり』で、第19回読売文学賞（随筆紀行）を受賞している。

#### 50 著者 團伊玖磨 作品 鯛

作品について 1987年10月9日付「アサヒグラフ」掲載、1990年刊『明けてもパイプのけむり』に収録された随筆である。

本文は長い為、省略

出典 『明けてもパイプのけむり』朝日新聞社 1990年 p.19～22

著者について 「金米糖」(團伊玖磨著)の項を参考のこと

51 著者 近松門左衛門 作品 大職冠

作品について 1711(正徳元)年冬、竹本座で上演された浄瑠璃で、のち字治座でも改訂上演されている。能の「海女」や幸若舞の「大織冠」などをもとにして、蘇我入鹿と藤原鎌足のことを脚色したもの。入鹿を討とうとして、唐土の萬戸将軍を装った有風親子が、逆に入鹿らに取りおさえられる場面である。

此日の本や葦原の、四國の地に聞えたる、讃州志度の浦舟の、美女と變じ戯れて、玉を奪ひ大蛇となり、飛んで入りたる青海の、底意残さぬ御物語、「ア、言馴れぬ日本詞疲勞れたり」こんへいあるへい花ぼうる、かすてらかるめらやうかんかんと言ひければ、愚の兩人實と思ひ、いでいで披露仕らん、暫く是にと待遇して打連れ奥に入りにつけり、仕済したりと有風親子、眼と目を見合せ、奥を見入って待つ處に、入鹿の大臣金巾子の冠、麴塵の装束、さながら天子の扮装、悠々と動き出て、「萬戸将軍とは彼なるかと」目をも放さずまもりつめ、對座にどつかと着座する、有風飛び蒐つて入鹿が眞中指通さんとする所を、さ知つたりと引外し、(以下略)

出典 『大近松全集7巻』所国松 1922年 p.131～132

著者について 1653(承応3)～1724(享保9)。江戸前期の浄瑠璃、歌舞伎狂言作者。

52 著者 津本 陽 作品 下天は夢か

作品について 1989年日本経済新聞社から四冊で刊行された。二條城での信長とフロイスの会見場面である。

信長は橋上に積んだ板のう上に腰をかけ、フロイスと向いあう。「そのほう、年齢はいくつでや」「私は天文元年（1532）生れにござりまする」信長は、やわらかそうな口髭をたくわえた上唇のあたりに、微笑のかけをみせた。「さようか、儂より三つうえの兄者かや」彼は南蛮人が流暢な日本語をあやつるのに、興味をひかれたようであった。フロイスはコンフェイト（金米糖）のはいったガラス瓶と、南蛮蠟燭数本を献上する。信長は聞く。「そのほう、ホルトギス（ポルトガル人）か」「さようにござりまする。」……

出典 『下天は夢か2巻』日本経済新聞社 1989年 p.188～189

著者について 1929（昭和4）年、和歌山県生れの小説家。本名寅吉。『深重の海』で、1978（昭和53）年に直木賞を受賞。以来、歴史小説、犯罪小説、社会派小説等、幅広く活躍し、新剣豪小説の担い手としても活躍している。

### 53 著者 寺島良安 作品 和漢三才図会

作品について 江戸時代の絵入り百科事典といった内容のもの。成立は、自序によると1712（正徳2）年。明の王圻が著わした『三才図会』にならって、和漢古今の諸事物を項目別にし、図を入れて、漢文で考証している。巻105の中で、金平糖の製法などに触れている。

糖花 渾平糖〔俗稱〕／附 小鈴糖

按糖花造法用大白沙糖〔如前法以卵製〕入麪〔少許〕畧煎如膏別以銅鍋熬胡麻中徐入件糖膏則胡麻每一粒被衣亦奇也〔火之文武宜得其中〕以指傳之所粘着於鍋之糖屑刮取粗末令如米屑畧轉之復次入糖膏而搏爲

團丸則生細朮糯〔俗呼之曰足〕似石龍芮子而潔白也長崎人最能之京師坂陽亦作之稍劣矣／一種有小鈴糖者似糖花而中空味稍劣矣

出典 『倭漢三才図会』正徳2（1712）年版 巻105

著者について 生没年未詳。江戸中期の漢方医。大坂の御城入医師であった。号は林堂。和漢の学に通じており、105巻から成る『和漢三才図会』を著す。

54 著者 寺田寅彦 作品 備忘録

作品について 1927年9月「思想」掲載。この「備忘録」の一節に「金平糖」の文がある。金平糖について科学的な面から考察を加えている。

本文は長い為、省略

出典 『寺田寅彦全集2巻』岩波書店 1950年 p. 506～511

著者について 1878～1935。物理学者、随筆家。

55 著者 寺田寅彦 作品 自然界の縞模様

作品について 1933年2月「科学」に掲載されたものである。自然界に見られる「縞模様」について、諸現象や問題点などを記している。その中に金平糖も取り上げられている。

本文は長いため、省略

出典 『寺田寅彦全集第4巻』岩波書店 1950年 p. 66～

著者について「備忘録」（寺田寅彦著）の項を参照

56 著者 寺田寅彦 作品 映画雑感（Ⅲ）

作品について 1934年9月「文学界」掲載。寅彦は映画もよく見、批評も書いているが、これもそのうちの1つである。この中で「バンジャ」という映画についての部分で、金平糖の笑話を紹介している。

ごちそうに出した金米糖のつぼにお客様が手をさし込んだらどうしても抜けなくなったのでしかたなく壺をこわして見たら挙いっばいに欲張って握り込んでいたという笑話がある。こんな人間はまず少ないであろうが、これとよく似た係蹄に我れとわが手にかかって人の虜になり生き恥をさらす人は実に数え切れないほど多数である。「めがね猿」ばかりを笑うわけにはゆかないのである。

出典 『寺田寅彦全集第5巻』岩波書店 1950年 p.129～133

著者について「備忘録」（寺田寅彦著）の項を参照

57 著者 寺田寅彦 作品 昭和3年7月31日付中谷宇吉郎宛書簡

作品について 1928（昭3）年7月31日付の中谷宇吉郎に宛てた書簡である。研究室の様子などの中に、金平糖の実験について記している。

大學中期學生（東京の）が一人来て金米糖の実験を休暇中やって居る。  
存外面白い（此れは秘密にあらず）

出典 『寺田寅彦全集第16巻』岩波書店 1951年 p.189～192

著者について 「備忘録」(寺田寅彦著)の項を参照

58 著者 寺田寅彦 作品 昭和3年9月14日付中谷宇吉郎宛書簡

作品について 1928(昭和3)年9月14日付の中谷宇吉郎宛の書簡である。この中で一言だけ金平糖に触れている。

金米糖の研究もどうやら眼鼻はついたやうであります, その内に彙報へでも出しておきまじやう

出典 『寺田寅彦全集第16巻』岩波書店 1951年 p. 213 ~ 216

著者について 「備忘録」(寺田寅彦著)の項を参照

59 著者 寺田寅彦 作品 昭和3年10月13日付小宮豊隆宛書簡

作品について 1928(昭和3)年10月13日付の小宮豊隆宛書簡。この書簡の後半で金平糖について触れている。

山田孝雄氏に御會ひの節「金米糖」といふものが大凡何時の時代から出現したものか聞いておいて頂度と存じます, 其内に論文をかく積りであります。金米糖製造を見學に淺草の菓子屋へ出張したのだがその菓子屋先生が先日やつて来て「アレはドーなりましたか」と聞きに来たのは面白かつた, その内に別刷と酒一升携へて禮に行かうと考へて居ます。

出典 『寺田寅彦全集第16巻』岩波書店 1951年 p. 219 ~ 220

著者について 「備忘録」(寺田寅彦著)の項を参照

## 60 著者 寺田寅彦 作品 雑記帳

作品について 寅彦の雑記帳である。昭和9年7月、星野温泉に出掛けた際に記したもののうち、7月25日の部分に金平糖が、たとえとして、出てくる。

花の中心に緑色の金米糖のやうなものがある、これが花で花卉のやうなものは総苞といふものらしい。やまぼうし一名やまぐはといふのと同じかどうか分らない。

出典 『寺田寅彦全集第18巻』岩波書店 1951年 p. 342

著者について 「備忘録」（寺田寅彦著）の項を参照。

## 61 著者 寺田寅彦 作品 補遺

作品について 『寺田寅彦全集』の「補遺」に収められている「寺田寅彦先生談話會」の中で、金平糖の角について触れられている。

本文は省略

出典 『寺田寅彦全集第18巻』岩波書店 1951年 p. 760

著者について 「備忘録」（寺田寅彦著）の項を参照

## 76 著者 中谷宇吉郎 作品 寺田寅彦の追想

作品について 寺田寅彦との関わりの中で、寅彦の思い出を記したものである。その中の「寅彦夏話」の「二. 線香花火と金米糖」に金平糖につい

て寅彦が語った事や実験が行われた事などを記している。

本文は長いため、省略

出典 『寺田寅彦の追想』 甲文社 1947年 p. 107 ~ 110

著者について 1900 ~ 1962。物理学者、随筆家。石川県生れ。東大物理学科卒。寺田寅彦のもとで実験物理学の指導を受けた。理化学研究所を経て北大教授になったが、その間にイギリスへの留学を経験している。北大では寒地の自然現象の研究を企て、1941年に雪の研究で学士院賞を受賞している。寅彦の科学随筆を受けついで、『冬の華』『続冬の華』『第三冬の華』をまとめた。解説書は『雪』『雷』など、多い。第二次世界大戦後、プリンストン高級科学研究所教授になっている。

#### 77 著者 夏目漱石 作品 彼岸過迄

作品について 1912 (明治45) 年に朝日新聞に連載された長編小説である。「僕」の姉の子である市蔵が、「僕」の所へ旅先から出した手紙の中に、言葉の比喩として金平糖が使われている。

「僕はこの辺の人の言葉を聞くと微かな酔に身を任せた様な気分になります。ある人はべたついて厭だと云いますが、僕はまるで反対です。厭なのは東京の言葉です。無暗に角度の多い金米糖のような調子を得意になって出します。そうして聴手の心を粗暴にして威張ります。…

…

出典 『作家用語索引夏目漱石7巻』 教育社 p. 864 (4945行目)

著者について 『吾輩は猫である』の項を参照のこと。



## 78 著者 夏目漱石 作品 吾輩は猫である

作品について 1905 (明治38) 年1月から翌年8月にかけて「ホトトギス」に掲載され、また、1905年から1907年にかけて大倉書店から三巻で刊行された長編小説である。中学校教師苦沙弥先生の書齋に集まる迷亭、寒月といった明治の教養ある紳士たちの談論を、飼い猫の眼から風刺的に描いた作品である。苦沙弥先生を中心に、東風や迷亭が議論をする場面で、金平糖が引き合いに出されている。

探偵と云えば二十世紀の人間は大抵探偵の様になる傾向があるが、どう云う訳だろう」と独仙君は独仙君だけに時局問題とは関係のない超然たる質問を呈出した。「物価が高いでしょう」と寒月君が答える。「芸術趣味を解しないからでしょう」と東風君が答える。「人間に文明の角が生えて、金米糖の様になりいらするからさ」と迷亭君が答える。今度は主人の番である。主人は勿体振った口調で、こんな議論を始めた。「それは僕が大分考えた事だ。僕の解釈によると当世人の探偵的傾向は全く個人の自覚心の強過ぎるのが原因になって居る。僕の自覚心と名づけるのは独仙君の方で云う、見性成仏とか、自己は天地と同一体だとか云う悟道の類ではない。……」「おや大分むずかしくなって来た様だ。苦沙弥君、君にしてそんな大議論を舌頭に弄する以上は、かく申す迷亭も憚りながら御あとで現代の文明に対する不平を堂々と云うよ」「勝手に云うがいい、云う事もない癖に」

出典 『作家用語索引夏目漱石11巻』教育社 1986年 p. 402 (10354行目)

著者について 1867 (慶応3) ~ 1916 (大正5)。小説家、本名金之助。

## 79 著者 西川如見 作品 長崎夜話草

作品について 長崎の地誌について書かれたものである。巻五は、附録として、長崎の土産を集めている。そのうち「南蛮菓子色々」の中に金平糖が含まれている。

南蛮菓子色々 ハルテ クジャアド カステラボウル 花ボウル コンペイト アルヘル カルメル ヲベリヤス パアスリ ヒリヨウス  
ヲブダウス タマゴソウメン ビスカウト パン 此外猶有べし。

出典 西川如見著『町人囊, 百姓囊, 長崎夜話草』岩波書店(岩波文庫)  
1942年 p. 304

著者について 1648～1724。江戸中期の天文、地理学者である。本名は忠英、通称次郎右衛門。普通には如見として知られている。号は求林斎。長崎の人。京都の儒者南部草寿が長崎に来て開いた塾に入門して儒教を学んだ。その傍ら、中国及び西洋の天文暦算を研究した。儒教的自然観をとりつつも、実証主義的見地を展開したといわれている。庶民教育にも貢献し多くの著作があり大抵は出版されている。

### 83 著者 服部撫松 作品 東京新繁昌記

作品について 1874(明治7)年に五編まで、1876年に第六編が刊行された。六冊から成る黄表紙である。著述者はすべて服部誠一の名義になっている。寺門静軒の『江戸繁昌記』にならって著わされたもので、文明開化の時代を縦横に活写している。原文は漢文で書かれており、その中の三編「増上寺」に金平糖が登場する。

果たして良縁有らば宮請ふ為に之を謀れ。客他の目を偷んで飽くまで  
毬糖<sup>コンペイトウ</sup>を食ひ、盆中纔かに数粒を餘す。勉めて笑顔を開いて曰く、僕が如き者は如何、母公之を允さば娘君亦た従はん。曰く、敢て希望する所也。

出典 『明治文學全集 4 成島柳北 服部撫松 栗本鋤雲集』筑摩書房  
1969年 p. 185～186

著者について 1841（天保12）～1908（明治41）年。戯作家で、本名は誠一。陸奥国の儒官の子として生まれたが、明治4年廃藩置県とともに上京、明治7年に『東京新繁昌記』を著作、出版。その後、漢文戯作雑誌「東京新誌」を刊行、またその後継誌として「吾妻新誌」を出したりした。政論新聞などにも関係したが、1896年（明治29年）に仙台一中の作文教師に招かれて、文壇から姿を消した。

#### 86 著者 ルイス・フロイス 作品 日本史

作品について 1883年から15年かけて執筆された。その中で、フロイスは織田信長に金平糖を送った事を記している。

信長はさっそくその円楯を自分の部屋に掛けさせ、ばあでれルイス・フロイスに礼を述べさせ、返書を豊後へ送るようにばあでれフランシスコ・カブラルの書翰に返事を書いた。その後、ばあでれは同じ隆佐ジョーチンを通じて金米糖一瓶を届けた。信長は前に円楯を〔貰った時に〕劣らない喜びでそれを受取って、ばあでれはどこにいるかと尋ね、たいそう親切鄭重な書翰を書いて、彼がみやこに来た原因をそこで簡潔に説明した。

出典 『日本史——キリシタン伝来のころ——5』平凡社（東洋文庫）1988年 p. 100。

著者について 1532～1596。ポルトガル人イエズス会士。インドで司祭となり、1562年来日。長崎で26聖人の殉教を目撃し、滞在中140余通の日本通信を本国に送った。日本伝道に大きな役割を果たした。

## 87 著者 ルイス・フロイス 作品 日欧文化比較

作品について 1585 (天正13) 年に加津佐でまとめられたものである。日本とヨーロッパの社会の生活様式や風俗の違いを記しているが、また、安土・桃山時代の社会、生活、風俗を知る重要な史料ともなっている。

われわれの間ではある人が柄杓一杯の水を飲むために、一匙の糖菓<sup>コンフェイト</sup>または砂糖漬の截片を与える。日本では杯 sacāzuqi をとるためには糖菓<sup>コンフェイト</sup>一箇またはその位の量のものを与えれば十分である。

出典 『大航海時代叢書XI (日本王国記・日欧文化比較)』岩波書店 1965年 p. 633

著者について 「日本史」(フロイス著)の項を参照のこと

## 90 著者 宮沢賢治 作品 ツェねずみ

作品について 発表年等、作品についての細かい事項は出典本にも特に触れられていない。この物語の冒頭で、金平糖が使われている。

本文は長いため省略

出典 『新修宮沢賢治全集』筑摩書房 p. 156 ~ 158

著者について 1896 (明治29) ~ 1933 (昭和8) 詩人、児童文学作家。

## 91 著者 村瀬之熙 作品 枕苑日涉 (芸苑日涉トモ)

作品について 文政2年初刊、安政4年に補刻されたもので、12巻から成

る。和漢の芸苑及び俗間の事物の起源等の考證を主として記述されたもので、その正確、的実なことは、本邦罕に有る、という称を得たといわれる。この中の「卷之九 饗糖吹糖纏糖」の項に金平糖が出ている。

饗糖。即今之阿<sup>アル</sup>屢<sup>ヘイ</sup>閉<sup>タウ</sup>糖。成花果禽魚之形者。其紅白間道者。曰間道糖。成條子者曰糖通。空其心者曰吹糖。曰繭糖。曰窠絲糖。曰乳糖。皆阿屢閉糖之類也。實心者曰糖粒。曰糖瓜。即今之<sup>ユン</sup>谷<sup>ヘイ</sup>吽<sup>タウ</sup>閉糖之類也。以糖<sup>カヤ</sup>纏<sup>クルミ</sup>樞<sup>シソ</sup>。茶<sup>ホ</sup>。胡桃<sup>クネンホ</sup>。紫蘇穗<sup>ミカン</sup>。橙。橘皮之類者。曰糖纏。所謂茶纏糖。胡桃糖是也。

出典 『日本随筆全集第1巻』 国民図書株式会社 1927年 p. 618

著者について 通称嘉右衛門，字は君績，号は栲亭又は神州という。美濃出身で，京師に出て，儒を以て諸生に教授した。その後，秋田侯佐竹氏に聘せられて其学問となり貢献するところが大きかったが，後任を致して復び京師に来て講説を業とした。その儒門の主張は古学にあり，また詩文に長じていたという。著書には他に『論語集義』『學庸集義』『周易拾象稿』『楓樹詩纂』『栲亭集』などがある。

#### 94 著者 森鷗外 作品 雁

作品について 1911（明治44）年から1913（大正2）年にかけて「スバル」に発表された長編小説。高利貸しの妾お玉が大学生の岡田と知り合い，思慕の情をつのらせるが，結ばれずに終る。これを，岡田の友人である「僕」の回想という形で描いている。鷗外の作家としての手腕を示した現代小説の完成作とも言われている。

寄宿舎には小使がいた。それを学生は外使に使うことが出来た。白木綿の兵児帯に，小倉袴を穿いた学生の買物は，大抵極まっている。所謂「羊羹」と「金米糖」とである。羊羹というのは焼芋，金米糖と云

うのははじけ豆であったと云うことも、文明史上の参考に書き残して置く価値があるかも知れない。小使は一度の使賃として二銭貰うことになっていた。この小使の一人に末造と云うのがいた。

出典 『作家用語索引森鷗外3巻』教育社 p. 496 (149行目)

著者について 『キタ・セクスアリス』の項を参照のこと。

95 著者 森鷗外 作品 澀江抽斎

作品について 1916 (大正5) 年1月3日から同年5月17日まで、「東京日日新聞」「大阪毎日新聞」に連載された長編小説。弘前の医官、澀江抽斎の事跡、志操、交友、趣味、性格、後裔などを克明に考証し解明した、史伝ものの代表作ともいえるものである。その中で、抽斎の四女である陸くがが本所緑町に砂糖店を開くくだり (その百十三) で、金平糖が出てくる。

或日貴婦人が女中大勢を連れて店に来た。そして氷砂糖、金米糖などを買って、陸むすめに言った。「士族の女で健気にも商売を始めたものがあると云う噂を聞いて、わたしはわざわざ買いに来ました。どうぞ途中で罷めないで、辛棒をし徹して、人の手本になって下さい」と云った。後に聞けば、藤堂家の夫人だそうであった。藤堂家の下家敷は両国橋詰にあって、当時の主人は高猷たかゆき、夫人は一族高松たかたけの女であった筈である。

出典 『作家用語索引森鷗外5巻』教育社 p. 837 ~ 838 (5006行目)

著者について 『キタ・セクスアリス』の項を参照のこと。

96 著者 森鷗外 作品 キタ・セクスアリス

作品について 1909（明治42）年に発表されたが発売禁止処分を受けた作品。性欲に冷淡だと自称する哲学者が、自己の性生活を告白する自伝体小説。

僕に帰り掛に寄って行けと云った男も、僕を少年視していたのである。二三度寄るまでは、馳走をしてくれて、親切らしい話をしていた。その頃書生の金米糖といった弾豆、書生の羊羹といった焼芋などを食べさせられた。但しその親切は初から少し粘があるように感じて、嫌であったが、年長者に礼を欠いてはならないと思うので、忍んで交際していたのである。

出典 『キタ・セクスアリス』新潮社（新潮文庫） p. 30

著者について 1862（文久2）～1922（大正11）。小説家、軍医。本名林太郎。

#### 97 著者 森田四郎右衛門 作品 南蛮料理書

作品について いわゆる南蛮菓子、南蛮料理の製法書である。巻末に「森田四郎右衛門から田中左兵衛殿参」と記されていることから、森田から田中へ遺ったものと思われるが、実際の筆者が森田であるかどうかはまだ確認されるに至っていない。菓子類の製法記載に併せて、南蛮料理、魚の料理、南蛮漬物の製法などが記載されている。

こんへいとの事／しんにこまかにつけひかしんにしてはたのよきなへに此しんいれて砂糖あめよりもまへほとにえさましすこしつも此しんにかけていはなのつきたるとき三ツにわけ壺つはあかくそめ壺つはあをくそめ壺つはしろくして此三色を壺つにませあわせ申也口伝有之  
（口語訳）ごまか肉桂を芯として用意する。肌のなめらかな鍋にこの芯を入れ、砂糖を飴の時より早めに冷ましたものを少しずつこの芯に

かけながら熬る。花がついたら三つに分ける。一つは赤く、一つは青く染め、一つは白のままとする。でき上がったら以上の三色を混ぜる。口伝がある。

出典 『日本料理秘伝集成第13巻』 同朋舎 p. 268 原文は上段、口語訳は中段より。

著者について 標題の著者は、国書総目録による。

100 著者 やなせたかし 作品 こんぺい糖の花

作品につて 全国の方言で作られた詩を集めて編まれた『方言詩集こんぺい糖の花』の中の一つ。この詩の作者は風林由梨。

そばさ ちんけえ小川あったごと / おぼえでねえげ? / 春にはこんぺい糖みでえな / ピンクや白のめんこい花咲いだっけ / ほんどにほんどに / 好きだったんだ / んだげんちょ / 小川の上には家建ちちまっで / こんぺい糖の花は / 今じゃ アスファルドの下なんだ  
田んぼど柿の木は / 今でも あるんでねえべか / あのごろみだく / 歩いて行ってみっぺ / この道 通っで

出典 『方言詩集こんぺい糖の花』 やなせ・たかし編 (株)サンリオ 1988年 p. 32 ~ 33

著者について 福島県いわき市の人。編者やなせ・たかしは、月刊「詩とメルヘン」編集長として知られている。

101 著者 山下喜子 作品 山下喜子集



作品について 1984（昭和59）年作の俳句。またこの句の中の「百の角」は著者第二句集の名にもなっている。

なやらひの金平糖に百の角

〔蘆山寺追儺会に金平糖を売っていて俳趣となし得た福。百鬼夜行の都の昔を思う……とあとがきして、「百の角」を第二句集名とした。〕

出典 『自註現代俳句シリーズ第V期 35 山下喜子集』 俳人協会 1986年 p. 122

著者について 1927（昭和2）年生れ。1959年（昭和34）年馬酔木入門、1971（昭和46）年同人。1984（昭和59）年には堀口星眠氏に従って、「椽」同人になる。1969（昭和44）年に馬酔木新樹賞、1985（昭和60）年に第一回椽賞を受賞している。他の著作に、句集『白川』『百の角』、随筆集『四季の流れに』がある。

## 102 著者 山中共古 作品 権菟藟

作品について 1914（大正3）年から1916（大正5）年ごろにかけて作り上げられた。『砂払』『続砂払前・後』に続く「酒落本の書きとめ」ともいうべきものである。酒落本44部の作品中から、時代風俗をみるに足る一節を書き抜いて感想や考証を加えている。この作品には、酒落本評判記『花折紙』の目録（岩波文庫本では省略）や、豊介子の『岡場所遊廓考』の見取り図も収められている。この中で、山東京伝の『通信総籬』の一節が書きとめられている。

豆のはいつたこんぺいとうを出し、  
豆をしんに入れし金平糖ありしと見ゆ。

出典 『砂払 江戸小百科 下』岩波書店（岩波文庫）1987年 p. 54

著者について 1850（嘉永3）～1928（昭3）年。共古は号で、初め平蔵のち笑<sup>えみ</sup>と改称した。幕臣の子として江戸に生まれ、和宮様広敷添番、静岡藩英学校教授を勤める。クリスチャンとなり、東洋英和学校神学科を卒業し、宣教師となった。日本の民俗に興味を示し、民俗学の開拓者としての著述が多い。なお、柳田国男著『石神問答』には、柳田と共古の書簡による問答が収められている。1919（大正8）年には、青山学院図書館長となっている。

#### 104 著者 藍江 作品 郭通遊子

作品について 引用書の解題に依ると、刊記奥付ともにならないために、刊行年は不詳であるが、序の「馬の春」という記述から、寛政十年戊午の正月板と推定されている。その発端部分、「茶人でなく俳人らしく医者でなく何んだかしれもの表徳」で「うき世を酒とけいせいにのがれている」過行なる人物が「しのぶがおかのあたりにすむ」「むすこかぶいやみのなき通人」で「うらわかきまだ廿五のあかつきまゝならぬ部屋すみの身のうへ」の宗子という人物の訪問を受ける場面である。

〔過行〕今朝はついぞなくうちのめしをくひやした今湯あかりに釜がたぎりやすから一ツふくのまふと思つたらついねやしたサア一ツぶくけんじませうか（ト過行はゐなをりうす茶たていだす）〔宗〕菓子は何だもなかゝこんぺいか〔過〕何サこゝに紅谷がうば玉がありササアおがりなさへ（トやうじをそへて出す）〔宗〕是は妙だね

出典 『洒落本大成第17巻』中央公論社 1982年 p.70～71

著者について 内題次行に「藍江作」とあり、「らんかふ」なる人物に書かれたものであるが、著者の細かい経歴などは不詳。

## 105 著者 冷月庵谷水 作品 歌仙の組糸

作品について 1748（寛延元）年、江戸の出雲寺和泉掾から出版された。一卷一冊本藍色表紙で52丁から成る。二汁七菜の献立をあげ、必要に応じて簡単な調理法を記している。1カ月に3種ずつ、36種、その36の数字と三十六歌仙を重ね、これらの献立をいと口として献立作りの参考にするようにとの意図をふくめ『歌仙の組糸』としている。底本は加賀文庫にみられる。その底本では26ウ、5月の献立の中に金平糖がみられる。

くわし／卷せんへい／こんへい糖／もみち／密漬みつかん／小らくかん

出典 吉井始子編『翻刻江戸時代料理本集成第3巻』臨川書店 1979年  
p. 303 下段

著者について 著者の細かい経歴などは不詳。

## 106 著者 不詳 作品 古今名物御菓子秘伝抄

作品について 1718（享保3）年に京都の書林、水玉堂梅村市郎兵衛により刊行された。日本初の菓子製法の専門書とも言われ、南蛮菓子が多いことが特徴としてあげられる。

金米糖 氷砂糖を水で一遍洗い、氷砂糖一升（約1.4kg）に対して水二升（3.6ℓ）を入れて煮溶かし、絹篩きぬふるいでこし、それを半量になるまで煮つめる。別の平鍋けしに介子の実を入れて弱火にかけ、煮つめておいた砂糖を少しずつかけて茶筌ちやせんでかきまわす。何度も何度も砂糖をかけてはかきまわすうちに、大きくいちごのようになる。ただし、砂糖は五等分して五色に仕立てる。青は青花、黄はくちなし、赤は形紅、白はそのまま、黒は灰墨で染める。

出典 『古今名物御前菓子秘伝抄』作者不詳，鈴木晋一訳，教育社新書（原本現代訳132）1988年 p. 21

著者について 序文は水玉堂になっているが，詳しくは分っていない。

107 著者 不詳 作品 名代干菓子山殿

作品について 1778（安永7）年刊の黄表紙。上中下の三冊から成る。落雁や有平糖などの菓子が立ち回りをみせる。この中で金平糖は，物語の発端で，干菓子山殿秘蔵の茶碗をぬすみ出す，という役である。

本文省略

出典 『名代干菓子山殿』（国立国会図書館蔵）

著者について 不詳。絵は鳥居清長。

108 著者（神宮司庁等編） 作品 古事類苑

作品について 百科事彙。本文1千巻。洋装本51冊（1927年再版60冊）から成る。1896年から1914年にかけて刊行された。歴代の制度や文物，社会百般の事項を，天，歳時，地，神祇以下30部に類別し，六国史以下慶応3年以前の基本的な文献から採録した例証を原文のまま挙げている。このうち「飲食部 九 菓子」で、『守貞漫稿』『日本永代蔵』『大江俊矩記』『書言字考節用集』『芸苑日涉』『一話一言』などの文献をあげている。

本文は長いため，省略

出典 『古事類苑』吉川弘文館 p. 659～660

著者について 文部省，神宮司庁等が編纂。

109 著者 不詳 作品 朝鮮人初参候献立

作品について 寛永13年7月と記されている。成立はこのころか。料理の献立の「五つ目」に金平糖が出ている。

地紙（作り物梅ノボク） サタウ コンペイタウ コセウ，トウガラシ  
焼塩，キリコ手樋 金銀ダミ絵有

出典 『日本料理大鑑第3巻』1958年 p. 9

著者について 不詳

110 著者 不詳 作品 韃靼漂流記

作品について 1644（寛永21）年，越前三国浦新保村の竹内藤左衛門とその子藤蔵，国田兵右衛門の船三艘に58人が乗り組んで，松山へ商売のために出帆するも海上で嵐にあつて，韃靼国へと漂流して，帰ってくるまでの覚え書である。日本へ帰る途中，宗対島守古川伊右衛門からの差し入れの中に金平糖がみられる。

同廿八日にたうねんき（東萊）と申處着申候，其所の地頭も大名にて，御振廻被下候，紙二貼づゝ串柿十五連米五俵干鱈式百枚酒肴味噌鹽被下候夫より宗對守殿御侍衆，古川伊右衛門殿に掛目候に付，其嬉しさ身も世もあられ不申候韃靼大明の物語を御聞候て，對馬守殿御家老衆へ御状被差添候，古川伊右衛門殿より酒樽壹駄椎茸一斗烏賊百枚紙十五束こんぺいとう十斤，きせる二十本たばこ十斤いれ箱被下候，三月十七日對州鰐の浦へ着申候

出典 『続帝国文庫 漂流奇談全集 全』博物館 1900年 p. 5

著者について 漂流し帰国した者の中で、国田兵右衛門宇野與三郎に対して聞いた内容を記しているが、著者が特定できないため、不詳とする。

#### 文 献 一 覧

- 1 朝日文左衛門 鸚鵡籠中記宝永7年4月22日「名古屋叢書続編11巻」名古屋市教育委員会 1968 p. 571
- 2 安達 巖「日本の食物史」同文書院 1979 p. 205—206
- 3 有馬朗人 寺田寅彦の復権 朝日新聞(夕刊) 1988年3月17日
- 4 安楽庵策伝「醒睡笑」岩波文庫
- 5 石崎利内 番茶菓子と雑菓子類「新和菓子大系下巻」製菓実験社 1972 p. 132—133
- 6 石橋幸作 仙台駄菓子左右競へ大番附「駄菓子のふるさと」未来社 1965
- 7 石橋幸作 金平糖談議「駄菓子風土記」製菓実験社 1965 p. 30—35
- 8 泉 鏡花 雛がたり「鏡花短篇集」岩波書店 1987 p. 19
- 9 井原西鶴 日本永代蔵 角川書店 p. 135—138
- 10 今田美奈子 アーモンドの花祭り「今田美奈子のヨーロッパのお祭り菓子辞典」 p. 110
- 11 内田銀蔵 日本近代史「明治文学全集78巻」筑摩書房 1976 p. 308下
- 12 越中哲也 南蛮貿易と西洋料理「長崎の西洋料理」第一法規 1982 p. 82—84
- 13 大江俊矩 大江俊矩記
- 14 大田南畝 一話一言「日本随筆大成別巻1巻」吉川弘文館 p. 23
- 15 小笠原武「食物の始まりと由来」都出版 1977 p. 96
- 16 御菓子や三人 慶安4年行幸御菓子渡帳 虎屋 1651 他に, 1689, 1694, 1696, 1746, 1750, 1762, 1770, 1773, 1776
- 17 小瀬甫庵 或問「太閤記」新人物往来社 1971 p. 30
- 18 小山田興清 松屋筆記巻70(7) p. 58
- 19 貝原好古 和爾雅巻之6「益軒全集巻之7」国書刊行会 1973 p. 709
- 20 亀田長興 候鯖一鱒巻之4 18頁
- 21 亀谷 博 金平糖の話「材料開発ジャーナル バウンダリイ」Vol. 4, 7, 1988
- 22 H. KAMETANI, C. YAMAUTI SUSPENSIONSELEKTROLYSE VON NICKEL MIT HILFE EINER SCHWINGZELLE, Z. ERZMETALL. BAND 27(1974), HEFT 3, S. 107-114

- 23 川北喜右衛門 原城紀事（原文）「長崎叢書（1）」長崎区役所 1926 p. 39  
（書き下し文）吉利支丹文庫第4輯 警醒社書店 1927 p. 3
- 24 川添利男 長崎はいからさん伝来記 川添利男発行 1983 p. 149
- 25 川端道喜 和菓子の京都 岩波新書 p. 129
- 26 北田薄氷 食辛棒「明治文学全集 95巻」筑摩書房 140下
- 27 喜田川季荘 守貞漫稿 名著刊行会 1976年 p. 439—440
- 28 喜多村信節 嬉遊笑覧巻10上「嬉遊笑覧4」日本随筆大成別巻10 吉川弘文館 1979年 p. 116
- 29 クオーク（編）クオーク下町探険隊は行く クオーク 1986年12月号 講談社
- 30 幸田露伴他 草鞋記程「明治文学全集 94巻」筑摩書房 1974 p. 57上
- 31 コーロス 1619年2月23日付書翰「大航海時代叢書第2期7巻 イエズス会と日本2巻」岩波書店 1988 p. 244
- 32 今 東光 東光食物行脚2 金平糖「あまカラ」1966. 10. p. 45—47
- 33 西條八十 お菓子の家「日本童謡集」岩波文庫 1957 p. 36
- 34 坂本四方太 夢の如し「明治文学全集 57巻」筑摩書房 1957 p. 348上
- 35 山東京伝 通言総籙「日本古典文学大系59巻」岩波書店 1958 p. 359
- 36 塩見坂梅庵 料理塩梅集物置部 千葉大学教育学部研究紀要第25巻第2部 1976 p. 185
- 37 平尾道雄（編）坂本竜馬の手紙「坂本龍馬のすべて」新人物往来社 1979 p. 121—122
- 38 島崎藤村 春「明治文学全集 69巻」筑摩書房 1972 p. 99上
- 39 島崎藤村 ふるさと（童話）「藤村全集9巻」筑摩書房 1967 p. 336—347
- 40 島崎藤村 破戒 新潮文庫 p. 172
- 41 清水桂一 たべもの語源辞典 東京堂 1980 p. 75
- 42 杉本苑子 コンペイトウ献上「日本の名随筆54」作品社 1987 p. 118—121
- 43 鈴木宗康 3月の菓子「茶席の菓子」世界文化社 1985 p. 71
- 44 鈴木宗康 茶の湯ライブラリー第5巻 淡交社 1968 p. 167
- 45 製菓実験社 製菓・製パン451号（月刊）
- 46（江島）其磧 軽口独機嫌「嘶本大系7巻」東京堂出版 1976 p. 244
- 47 醍醐山人 料理早指南「翻刻江戸料理本集成6巻」臨川書店 1980 p. 168
- 48 立原えりか 麦畑「月あかりの中庭」講談社文庫 1988 p. 99—116
- 49 團伊玖磨 続々パイプのけむり 朝日新聞社 1981 p. 176—180
- 50 團伊玖磨 鯛「明けてもパイプのけむり」朝日新聞社 1990 p. 19—22
- 51 近松門左衛門 大職冠「大近松全集7巻」1922 p. 132

- 52 津本 陽 下天は夢か2巻 日本経済新聞社 1989 p.188—189
- 53 寺島良安 倭漢三才図会 巻105 正徳二年(1712)
- 54 寺田寅彦 備忘録「寺田寅彦全集第2巻」岩波書店 p.506
- 55 寺田寅彦 自然界の縞模様「寺田寅彦全集4巻」岩波書店 p.66—69
- 56 寺田寅彦 映画雑感(Ⅲ)「寺田寅彦全集5巻」岩波書店 p.129—133
- 57 寺田寅彦 昭和3年7月31日付中谷宇吉郎宛書簡「寺田寅彦全集16巻」  
岩波書店 p.190
- 58 寺田寅彦 昭和3年9月14日付中谷宇吉郎宛書簡「寺田寅彦全集16巻」  
岩波書店 p.214
- 59 寺田寅彦 昭和3年10月13日付小宮豊隆宛書簡「寺田寅彦全集16巻」  
岩波書店 p.220
- 60 寺田寅彦 雑記帳「寺田寅彦全集18巻」岩波書店 p.342
- 61 寺田寅彦 補遺「寺田寅彦全集18巻」岩波書店 p.760
- 62 戸田盛和 金平糖成長のモデル「形の科学会報」1990年11月 p.39—  
42, 65
- 63 戸田盛和 乱れの形態—金米糖の科学—「ランダム系の物理学」培風館  
1981 p.13—33
- 64 戸田盛和 寺田寅彦と金平糖「数学セミナー」1986.8 日本評論社
- 65 富田 仁 南蛮菓子「西洋料理がやってきた」東京書籍 1983 p.77—  
118
- 66 長坂金雄 近世日本食物史 雄山閣 1935 p.90
- 67 中田友一 おーい、コンペーター あかね書房 1990
- 68 中田友一 コンペーター大研究「私大コース8月号」教育新聞社 1990  
p.12—15
- 69 中田友一 金平糖の魅力「愛育 11月号」恩賜財団母子愛育会 1990 p.  
4—5
- 70 中田友一 ああ金平糖 回転いす 中日新聞夕刊 1988年6月13日
- 71 中田友一 中日新聞 1990年4月16日 16面
- 72 中田友一 読賣新聞 1990年5月21日 12面
- 73 中田友一 クリスマン新聞 1990年8月5日
- 74 中田友一 北羽新報 1990年8月7日
- 75 中村 孝也 和菓子の系譜 淡交社 1967
- 76 中谷宇吉郎 寺田寅彦の追想 甲文社 1947
- 77 夏目漱石 彼岸過迄 作家用語索引 教育社 4945行目
- 78 夏目漱石 我輩は猫である 作家用語索引 教育社 10354行目
- 79 西川如見 長崎夜話草5之巻「町人囊, 百姓囊, 長崎夜話草」岩波書店  
1942 p.304
- 80 日刊スポーツ 1990年7月1日



- 81 日刑スポーツ 1990年11月14日 24面
- 82 日本社(編著) 日本がわかる本 日本社 1982 p.156
- 83 服部撫松 東京新繁昌記「明治文学全集4巻」筑摩書房 1969
- 84 福島 浩 金平糖の生成と其形状について 理研彙報9 1930 p.571—580
- 85 藤本如泉 菓子の歴史「日本の菓子」河原出版 1968 p.10—13, 61—62, 167—170
- 86 ルイス・フロイス 柳谷武夫訳 日本史5巻101章 平凡社 p.100
- 87 ルイス・フロイス 日欧文化比較「大航海時代草書 XI」岩波書店 1965 p.633
- 88 松尾夜城 和菓子物語 井上書房 1960 p.124
- 89 松田毅一 西洋との出会い 大阪書籍
- 90 宮沢賢治 ツェねずみ「新修宮沢賢治全集」筑摩書房 p.156
- 91 村瀬之熙 芸苑日渉巻之9「日本随筆全集第1巻」国民図書 1927 p.618
- 92 明治製菓 キャンデー「お菓子読本」明治製菓株式会社 1977 p.197
- 93 日本民具編 モースの見た日本 小学館 1988 p.149
- 94 森 鷗外 雁 教育社 作家用語索引 149, 150行目
- 95 森 鷗外 渋江抽斎 教育社 作家用語索引 5006行目
- 96 森 鷗外 キタ・セクスアリス 新潮文庫 p.30
- 97 森田四郎右衛門 南蛮料理書「日本料理秘伝集成13巻」p.268
- 98 柳田國男 新語論「定本柳田國男集18巻」筑摩書房 1963年 p.435
- 99 柳田國男 明治大正史「定本柳田國男集24巻」筑摩書房 1963年 p.179
- 100 やなせ・たかし こんぺい糖の花 サンリオ 1988 p.32—33
- 101 山下喜子 自註現代俳句シリーズ第V期35巻山下喜子集 俳人協会 1986 p.122
- 102 山中共古 権菟菟「砂払一江戸小百科一(下)」岩波文庫 p.54
- 103 吉田健一 金平糖成長条件の最適化(木更津工業高等学校電子制御工学科卒業研究論文) 1990
- 104 羅江 郭通遊子「洒落本大成17巻」中央公論社 1982 p.71
- 105 冷月庵谷水 歌仙の組系「翻刻江戸料理本集成3巻」臨川書店 1979 p.303
- 106 作者不詳 鈴木晋一訳 古今名物御前菓子秘伝承 教育社 1988 p.21—22
- 107 作者不詳 名代干菓子山殿
- 108 古事類苑 飲食部 1868—1926年 p.659
- 109 朝鮮人初参候献立「日本料理大鑑」第3巻 1958 p.9

- 110 韃靼(だつたん)漂流記「続帝国文庫漂流奇談全集」博文館 1900 p. 5
- 111 新撰菓子秘録「日本料理秘伝集成16巻」p. 206
- 112 全国の伝承・江戸時代〈人づくり風土記〉第42巻
- 113 ふるさとの人と知恵〈長崎〉組本社 1989 p. 132
- 114 江戸風俗資料第10巻〈江戸の舶来風俗誌〉展望社 1975 p. 270—276
- 115 淡交テキストブック・茶菓子歳時記 淡交社 1975
- 116 角川外来語辞典(第2版) p. 466
- 117 江戸語大辞典 講談社 p. 424
- 118 和菓子分類 製菓辞典 朝倉書店 1981 p. 8—9, 245—246, 321—322
- 119 金平糖「舶来事物起源辞典」名著普及会 p. 139 1987